

宋代禁〔カク〕下解塩の配給について

著者	河上 光一
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	31
ページ	1-14
発行年	1979-03-23
URL	http://hdl.handle.net/10114/11005

宋代禁榷下解塩の配給について

河 上 光 一

一 ま え が き

宋代、塩の種類として、海岸地方で海水を煮つめて採取する海塩、山西省南部の解池（塩池）で池水を乾して採取する解塩（池塩）、四川で井戸水を汲上げ煮つめて採取する井塩、河東で塩分の多い土に水を沃ぎその水を煮つめて採取する土塩などがあった。⁽¹⁾これら各種の塩は、宋代には、専売の対象とされていた。専売の形式には、生産から消費に至る凡ての過程を国の統制下におく完全専売と、過程の一部が統制の対象とされる不完全専売とがあるという。宋代の塩専売（榷塩）では両者が並び行われることが多かった。

宋史^{卷八}一食貨志^三上^下に、各種塩についての概説的記述がある。解塩については

引池為塩、曰解州解県安邑兩池、壅地為畦、引池水沃之、謂之種塩、水耗則塩成、籍民戸為畦夫、官廩給之復其家、募巡邏之兵百人、目為護宝都、歲二月一日藝畦、四月始種、八月乃止、安邑池每歲歲種塩千席、解池減二十席、以給本州及三京京東之濟兗曹濮單鄆州広濟軍京西之滑鄭陳潁汝許孟州陝西之河中府陝虢州慶成軍河東之晉絳慈隰州淮南之宿毫州河北之懷⁽²⁾衛州及澶州諸県之在河南者、凡禁榷之地、官立標識、候望以曉民、其通商之地、京西則蔡襄鄧隨唐金房均鄆州光化信陽軍陝西則京兆鳳翔府同華耀乾商涇源邠寧儀渭鄜坊丹延環慶秦隴階成州保安鎮戎軍及澶州之在河北者。とある。右文は、解塩の生産と配給区域について主として述べている。生産は、国によって強制徴発された畦夫と呼ばれる製塩労働者が国から報酬を与えられ、二月から八月に至る一定期間、年生産額を定められて行っていたことがわかる。生産は嚴重な国家統制の下におかれていたのである。⁽³⁾配給区域が定められ、それは禁榷の地と通商の地とに分けられてい

たという。

禁権の地というのは、同じ宋史に「禁権之地、皆官役郷戸衙前及民夫、謂之帖頭、水陸漕運」と、水陸漕運について、国が郷戸衙前および民夫を強制徴発して行ったとあるように、解塩の運送を国の統制下に行っていた地方をいう。嚴重な統制下に生産された解塩は、凡て国によって買上げられており、統制下に配給区域に運搬された塩は、国によって定められた値段・方法によって消費されることになっていたから、いわゆる完全専売が行われていた区域をいう。通商の地については、宋史に、「通商州軍、並辺秦延環慶渭原保安鎮戒德順、又募人入中芻粟、以塩償之」と見えたり、「兩池旧募商人、售南塩者、入錢京師權貨務」と、並辺等に芻粟を入納したり、京師權貨務に錢を納めた者に、その代償として塩を支払ったことを述べている。京師權貨務とは、茶塩などの専売品を、代償として支払うことを約束して、錢などを入納せしめた都に設けられた役所である。南塩は通商各州軍のうち京西方面で売られた解塩をいう。ちなみに陝西方面で売られた解塩は西塩といい、禁権地分で売られた解塩を東塩といっていた。⁽⁴⁾並辺や京師權貨務に芻粟や錢などを入納する人達には商人が多かったことと思われる。かくて商人は代償として塩を獲得し、通商地分と定められた地域内に解塩を運搬し販売するわけである。統資治通鑑卷四十九天聖八年十月壬辰条には、「商賈販鬻、官収其算」としている。通商の地というのは以上の如く生産は国の統制下におこなわれるが商人によって運塩・販売され、政府は商程のみを取立てる地方をいう。すなわち、不完全専売が行われていた地域といえることができる。

本稿は、専売となっていた解塩のうち、前者の、完全専売が行われていた禁権の地における解塩の配給について述べるものである。

二 解塩の禁権地分

国によって定められる塩の配給区域は、一般に行塩地分といわれている。消費面からすれば、消費区域である。宋代の各種塩の行塩地分については、宋史、宋会要、統資治通鑑編はじめ、宋代塩法の概略的記述を行った部分に多く述べられているが、簡にして要を得たと思われるのは、司馬光の涑水記聞五卷に見える「旧制、河南河北曹濮以西秦鳳以東皆

食解塩、益梓利夔四路皆食井塩、河東食土塩、其余皆食海塩」である。すなわち、曹漢以西秦鳳以東は解塩の、益梓等四川の地は井塩の、河東は土塩の、その他の地方は海塩の、それぞれ行塩地分と定められていたという。

行塩地分の策定は、五代の時代に遡ることができる。五代会要^{六二}二塩・後晋天福七年十一月条に、「先是、諸州府除俵散蚕塩徵錢外、每年末塩界分場務、約糶錢一十七万貫有余」とか、同書後周顯徳元年十二月条に、「食末塩州郡、犯私塩多於顆塩界分」などある末塩界分・顆塩界分は行塩地分のことである。末塩とは粉末状の塩のことで、海塩・井塩・土塩がそれに属し、顆塩は粒状の塩のことで解塩がこれに属する。宋会要食貨三塩法雜録建隆二年四月条に、「權貨官塩入禁法地分者、十斤死」と、専売とされた官塩が不法に禁法地分に入つた場合、持込額十斤以上の者は死罪であることを述べている。禁法地分は禁法が行われた行塩地分の謂である。建隆二年は、宋朝成立の翌年である。宋代の行塩地分が五代以来の考え方を受次いだものであることは明瞭である。

各行塩地分間に於いては、他塩の出入は厳に禁じられていた。宋会要食貨三開宝四年四月条に、「広州塩価甚賤、慮私販至荊湖諸州、侵奪課利、望行条約」とある。広州の塩は、一般に広南塩といわれ、海塩の一つとして広南路のみを行塩地分としていた。この広州塩が、荊湖諸州に私販されることを恐れ、私販禁止の条例を作ろうというのである。荊湖諸州は、海塩のうち淮南塩の行塩地分となつていた地方である。行塩地分間の他塩の出入を禁じていたことがわかる。また、同書太平興国二年二月十八日条には、「顆塩末塩雖皆是禁法地分、亦不許通相侵越」と、禁法地分間の侵越は堅く禁じられていたことを伝えている。この種の記事は他にも例が多い。解塩の行塩地分は、禁権の地と通商の地とに分けられていたが、先に引用した宋史の記事に見られるように、禁権の地には官が標識を立てて、一見して禁権地分であることがわかるように処置されていた。

さて、禁権地分・通商地分と二分されていたが、曹漢以西秦鳳以東といわれた解塩の行塩地分全体は、宋史記事によって見ると、三京と京東路・京西路・陝西路・河東路・淮南路および河北路の六路に及び、まさしく曹漢以西秦鳳以東の地方であった。次に禁権地分とされた地域を、前引の宋史記事によって、⁽⁵⁾具体的に眺めてみよう。

京東路は、涪州（山東省鉅野県）・兗州（同滋陽県）・曹州（同荷沢県）・濮州（同鄆城県）・單州（同單県）・鄆州（同

東平県西十五里）・広済軍（同定陶県）の六州一軍で、これら州軍は、京東路が、熙寧七年に東西両路に分けられた時、京東西路に属せしめられたところである。元豊九域志と比べてみると、京東西路には徐州の名が見え、広済軍の名が見えない。これは徐州は海塩地分とされていた所であり、広済軍は、熙寧四年に廃止され曹州に隸せしめられていたからである。すなわち、徐州を除く京東西路がすべて禁権地分とされていたのである。

京西路は、禁権地分と通商地分に分かれているが、禁権地分とされたのは、滑州（河南省滑県）・鄭州（同鄭県）・陳州（同淮陽県）・潁州（安徽省阜陽県）・汝州（河南省臨汝県）・許州（同許昌県）・孟州（同孟県）の七州である。京西路は、太平興国二年南北路にわけられ、のち一路に合わされたが、熙寧五年に再び南北両路に分けられた。上記七州は、京西北路に属せしめられている。元豊九域志の京西北路と上記七州と相違するところは、許州を欠き、潁昌府・蔡州・信陽軍の名が見える点である。潁昌府は、元豊三年に許州が府に昇格したもので、蔡州・信陽軍は、通商地分とされたものの中に、その名が見える。すなわち、蔡州・信陽軍を除いた京西北路全体が禁権地分とされていたわけである。

陝西路で禁権地分とされたのは、河中府（山西省永濟県）・解州（同解県）・陝州（河南省陝県）・虢州（同靈宝県）・慶成軍（山西省榮河県）の一府三州一軍である。これらの州軍は、陝西路が、熙寧五年、永興軍路と秦鳳路とに分けられたとき、永興軍路に属せしめられたところであるが、永興軍路は、元豊九域志によれば二府一五州一軍から成っていたので、上記の五府州軍は、その数から言えば、極めて少ない。特殊な扱いを受けていたと言えよう。五府州軍の位置は、山西省の西南と、これに接する河南省の北西の地方で、黄河の屈折点・潼関以東に位置している。河中府は、唐代、後述する河東路の四州とともに、河中節度使の管下にあったし、陝虢二州は、陝虢觀察史の管下に置かれており、それぞれ古くから一つのまとまった地域をなしていた。⁶⁾さらに、上記五府州軍は、いずれも解塩の生産地である解州に隣接する府州軍であり、宋代、解塩の生産者である畦戸は、これら五府州軍から徴用されていた。⁷⁾以上の如き事情から、五府州軍は、陝西路の中にあつて、同路の殆んどが解塩の行塩地分であったが、禁権地分として特殊な扱いを受けることになったものと考えられる。

河東路では、晋州（山西省汾陽県）・絳州（同新絳県）・慈州（同吉県）・隰州（同隰県）の四州が禁権地分とされている。

た。四州は山西省の南西部、汾水の西側に位する地帯で、前述したように、唐代、河中府とともに、河中節度使に管轄され、一つの地域にまとめられていたところである。河東路は、凡そ土塩の行塩地分とされていたが、土塩の産額は一二万石にすぎず、河東路全体に配給するゆとりがなかったのかも知れない。

以上のほか、解塩の禁権地分としては、東京（河南省開封県）・南京（同商邱県）・西京（同洛陽県）の三京と、淮南の宿（安徽省宿県）・毫（同毫県）二州、河北の懷（河南省沁陽県）・衛（同汲県）二州と澶州（河北省濮陽県東南五里）の属県中黄河以南にある諸県があった。三京が政治的に重要地点であったほか、これら各州は、いずれも先に述べた京東路・京西路等解塩の禁権地分とされた地方に接続した地域であり、宿州の如く、それまで淮南塩を食していたところで、流れを浜って淮南塩を運ぶことが経費の面で不便とされ、解塩の禁権地分に編入されたものもある。⁽⁸⁾

解塩の禁権地分とされた地域は、以上の三京二八府州軍であるが、全解塩行塩地分から見れば、東半分の地域である。これらの地方はいわゆる関中、中原などと呼ばれ、早くから開けていた地方で、人口も稠密なところであった。ちなみに元豊九域志によって、通商地分とされた地域との人口比をみると、禁権地分は主戸六四万五五六八戸、客戸三七万〇二九三戸、合計一〇一万六八六戸で、通商地分の主戸三〇万九六三三戸、客戸二五万三五六八戸、合計五六万三二〇一戸に對し、約二倍の人口を擁していた。早くから文化も開け、経済的にも開けていた地方が禁権地分とされていたわけで、禁権の目的が奈辺にあったかを考えさせられる。

三 禁権下解塩の配給組織

禁権下解塩の配給に関して、宋会要稿職官五都塩院条に

都塩院在歸德坊、掌受解州池塩、以給京城及京東諸州、出鬻廩祿之事、以京朝官及三班二人監領典五人主秤八人、大中祥符二年、又置院燒煎塩席、以三班一人、主之。

と、開封の歸德坊に都塩院があつて、解塩を受入れ、これを京城および京東の諸州に配給していたことを述べている。解

塩の禁權地分とされたところは、前節に述べた如く、三京・京東西路・京西北路・陝西路・河東路などであり、都塩院が京城と京東諸州にのみ解塩を配給していたとすると、それ以外の京西北路などでは、どのようにして解塩を配給していたのであろうか。結論的にいえば、上記の京城・京東諸州と、黄河に沿う京西北路の各州、生産地である解州を中心とする三つの地域に分けて、解塩の配給が行われていたようである。

1 京城・京東方面 京城京東方面は京西北路とともに塩が全く生産されない地方であったから、塩の配給には十二分の考慮が払われねばならなかった。この方面に配給すべき解塩は、前述の如く、都塩院に搬入されるのであるが、都塩院は帰德坊にあったという。帰德坊は、宋会要稿方域志・東京雜錄によると、新城内の城西廂二六坊の一であるが、此処は「汴京外城西壁なる西水門より外城内に入り、内城西壁汴河北岸角門子を過ぎ、内城を横流し……内城東壁なる汴河南岸角門子を通過し、更に外城東壁なる東水門を出でて東流する」といわれた汴河に沿う坊でなかったかと思われる。何故ならば解塩の搬入は当然のことながら汴河に頼ったことであろうから、搬入の便を考慮すれば、汴河沿いに都塩院を置くのが妥当と思われるからである。そうとすれば、解塩は汴河が開封に入ったところで、早速陸揚げされたものと考えられる。なお、都塩院は、前引宋会要稿都塩院条によると、在京塩院・京塩院と呼ばれることがあり、単に塩院と呼ばれることもあった。

都塩院には、京朝官・三班・領典・主秤などの役人がいたが、京朝官については、はじめ任期二年の升職者・院吏が解塩出納の任に当たっていたが、数千斛に及ぶ欠失を出した者がいたので、大中祥符六年十二月詔を出して、任期を一年とし、曾って親民經事に任じたことのある京朝官を当てることにしたものという。而して、離任に際して欠少ある場合は、専秤とともに均陪せしむることにしている⁽¹⁾。

都塩院における解塩の受入れについて、宋会要稿食貨^四宋漕運三「天聖七年十月条に、其在京塩院所納船般塩貨、並須公平受納、不得欺庄、秤勢支絶、縱有出剩不為勞績、但一界別無欠少、即依元条施行、監官三司申奏、下三班審官院、磨勘施行、塩綱如納正数足外、收到水路塩出剩、不以席数、並尽数正收入官、申著檢会天聖元年敕、只於在京支給賞錢、其塩院監專不得隱落故意不収、如稍違犯並行勘断、從之。

とある。右記事は、同書食貨^四水運条にも同文が見えているが、船で搬入されてきた塩貨を収納するとき、都塩院は、秤を胡摩化したりすることなく、公平に受納しなければならず、計り終つて余剰が出てても労績とはせず、その任期中に欠少がなければ、元条によつて施行し、磨勘を行うことになつていた。塩綱が、規定額以上の塩を搬入したときは、これを全て官に収め、余剰額に關係なく、天聖元年の敕によつて、在京で賞錢を支給し、塩院は、隠落故意によつて収納しないことのないようにしたという。收納の事務的手続きとしては、前引宋会要稿都塩院条に、大中祥符六年十二月条にかけて又詔、塩院受納塩貨、起置文簿、用三司印書給付本院、每簿先空紙写数号、納塩之時分明抄工納人姓名塩席納数及剩数、每旬于三司通押。

などとあり、都塩院には三司の印書のある文簿を備えておき、最初の空紙に数号を写し、納塩の時、書類作成者の姓名、納入者の姓名、納数、剩数を記入し、每旬三司に通押させたという。さらに、都塩院条・大中祥符七年正月条に

詔、塩院監官、自今不許般家居止、亦不得令閑雜人出入、每夜押宿慎火、監門二員、每院分定一員、毎日據出入官物抄歴点検、如涉欺弊、即捉搦、送三司其歴、每五日一赴提挙司点検。

と、都塩院の監官は、運塩の人々の院内居止を許さず、無用の者の出入が出来ないようにし、毎夜押宿して出火に氣をつけ、監門は出入官物の抄歴を点検し、もし欺弊があれば、これを捕え、歴を三司に送る。五日ごとに提挙司に赴いて点検を受けることになつていたと都塩院に勤務する者の服務規定を述べている。以上によつて、都塩院には京朝官・三班以下諸役人がいて、三司・提挙司の嚴重な監督の下に、細心に定められた服務規定下、搬入された解塩はすべて、公平に受納することになつていたことがわかる。¹²⁾

禁權法下の都塩院は、以上の如く解塩の受納を行うほか、受納した解塩の配給をも行つていた。配給先は、既述のように京城および京東諸州であつたが、これは、京城内と京東諸州との二つにわけて行われていた。京城内に対する配給については、宋会要稿職官五糴塩院条に

旧在永濟倉、後徙順成坊都茶庫、至道元年置、常出糴顯塩、及煎変御前塩花、以都塩院監官請領、真宗咸平二年六月詔、京城人戸許取便開鋪糴塩、每五日一起塩官請領、大中祥符七年四月詔、京城糴塩院、自今專差使臣二人、勿当隔手

出売、額定秤子一人旋作料次於本院請撥。

とある。すなわち、京城には糶塩院が置かれ、常に額塩すなわち解塩の出売を行っていた。糶塩院は至道元年に設けられたものというが、始め永濟倉にあり、後順成坊都茶庫に移されたという。順成坊は、都塩院があった帰德坊とともに城西廂の一坊であるが、都塩院から解塩の配給を受ける必要から、近坊に移されたものであろうか。糶塩院は都塩院に対して解塩の下付を出願して塩を受取り出売していたが、咸平二年、京城の人戸が店を開いて塩の出売を行うようになり、恐らく事務が輻奏したためであらうか、大中祥符七年には專任の使臣が置かれるようになったという。

京東諸州への配給について、宋会要稿食貨^{四二}熙寧九年二月十七日条に

三司市易司言、同詳定到開封府界陽武酸棗封邱考城東明白馬中牟陳留長垣祚城韋城京曹濮澶懷濟單解州河中府等処州縣官場可以出売解塩、從之。

とある。開封府所属の各県および曹濮等の府州には官場があつて解塩を出売していたことがわかる。右文は、会要に拠つたとして、続資治通鑑長編^{卷七四}熙寧九年四月癸丑条に、「其府界諸県并澶曹濮懷衛濟單解同華陝州河中府南京河陽等処、令提舉解塩司出売」と記されていて、地名に若干の出入・記載洩れの州もあるが、禁權法下、京東諸州に解塩を配給したというのであるから、会要・長編ともに記していない京東西路所属の兗・鄆二州も曹濮濟單の京東西路所属の各州と同じく州に官場が設けられ、そこから出売が行われていたと考えて差支えないのではなからうか。

なお、宋会要稿は、塩法について、食貨^一から食貨^二までの八巻にわたつて述べている。首巻の食貨^一は塩法^五として各路府州軍の売塩額を記している。而して冒頭は陝西路の延慶環州保安軍にはじまり、秦鳳路・河東路・淮南東路以下南方諸路に至っている。ここで問題としている禁權法下の各府州軍についての記事はないが、恐らく塩法^一―四の脱落している部分に記載されていたものであろう。記載されている部分についてみると、在城のほか各県・各鎮等別に売塩額が記されていて、塩の売出しは、各府州軍のほか、所属の各県鎮等において行われていたことがわかる。宋史食貨志塩の項に、「宋自削平諸国、天下塩利、皆歸眞官」とか「上書者言、眞官禁塩得利微、而為害博」などと、眞官が、塩利に大きな關係を持っていたことが記されているが、これは各県が塩の配給を行っていたことを示すものである。禁權法下の京東諸州

などでも、県鎮が各州官場とともに解塩の出卖をしていたとして決して誤りではあるまい。⁽¹⁴⁾

以上の如く、開封に置かれた都塩院に搬入された解塩は、開封城内にあった驛塩院と、京畿諸県・京東諸州に送られ、前者では店舗を開いた塩商人が、後者では各州城のほか、各県、各鎮に官場が設けられて解塩の出卖が行われていたようである。

2 京西路方面 開封並びに京東諸州への配給は上述の如くであるが、禁樵地分とされたものには京西北路や陝西路などがあり、都塩院の解塩配給先を京城および京東諸州と明示している以上、京西北路等には別の配給組織によって配給が行われていたと考えるのが妥当である。しかもこれら地域には明らかに一旦開封に全解塩を運び込んでしまうと、再度開封から搬出をしなければ配給不可能な地方がある。再搬出が不可能ということは、極めて利の無いことである。

解池において生産された解塩が、開封等の東方へ運搬されるとき、その運搬は黄河漕運によっていた。黄河漕運は三門白波黄渭汴汴水路発運司⁽¹⁵⁾が主っていた。一般に三門白波発運司といわれている。三門白波発運司は、はじめ陝西三門発運・三門発運務・黄河三門発運使と呼ばれていたが、真宗のころであろうか、白波が加えられて黄河三門白波発運使と呼ばれるようになった⁽¹⁶⁾、以後この名称が定着して使用されている。上述の如き名称の変遷は、黄河漕運の発展・充実を示しているようである。

三門白波発運使には三門塼塩務と白波務とが所属していた。宋会要稿食貨^二宋漕運^三および同書食貨^六水運の至道二年二月条に

詔自三門塼塩務裝發至白波務、每席支沿路拋撒耗塩一斤、白波務支堆塼消折塩半斤、自白波務裝發至東京又支沿路拋撒塩一斤、其耗塩候逐処下卸、如有擺撼消折、不尽数目、並令尽底受納、附帳管係。

と、三門塼塩務から白波務、白波務から東京への運塩には沿路拋撒耗塩を支し、白波務では堆塼消折塩を支していたことを伝えている。白波務には塩が堆塼され、三門と東京とをつなぐ運塩上の重要地点であったことがわかる。

三門発運使と呼ばれていた頃の発運使の治所は、恐らく三門付近の集津鎮⁽¹⁷⁾であったろう。三門は河南省陝県東南十里黄河の水中にあり、三門の險といわれた黄河漕運第一の難所であったからである。その後三門白波発運使と名称が変わり、

その名称が固定した時代の発運使の治所について、続資治通鑑長編卷一四二慶歷三年八月丙辰条に、この年三門白波発運使が罷められ、三門発運使と白波発運使とに分離独立し、それぞれ陝西轉運按察使、京西轉運按察使がその仕事を兼務したことを述べ、

旧制三門白波発運使治河清県。

と、その治所は河清県であったことを述べている。河清県について、太平寰宇記五卷西京河清県条に、「皇朝開宝元年移在白波」とあり、宋代に入り、河清県は白波に県治が移されていたことを記している。以上によってみると、三門白波発運使の治所は河清県治である白波に置かれていたことがわかる。すなわち、三門から白波に治所が移されたのである。この治所の移動は、恐らく先述したように、白波務が三門と東京との間にあって黄河漕運上重要な地位を占めるようになっていたからで、発運使の名称に白波の名が加えられたのと期を一にするものであろう。なお、宋代河清県は河南省孟津県東二十里といわれている。

さて、先に引用した宋会要稿漕運条と水運条とに見えた至道二年二月記事を見ると、三門埽塩務から白波務を経て東京に至る間の運塩には沿路抛撒耗塩を每席（一一六斤半）ごとに一斤の割合で支給し、白波務には堆埽消折塩を半斤の割合で支給したという。沿路抛撒耗塩とは、恐らく通路に当る沿路の各地方に塩を配給する際、積卸のため目減りすることを予知してその分を装発のとき余計に積込んだ塩のことを言うのではなからうか。堆埽消折塩は白波務に塩倉があり、そこに塩を積上げて置く場合の目減りを穴埋めするための塩ではなかつたらうか。かく考えると、三門を管轄する陝州から東京までの沿路各州県は、東京への運塩の途中で三門集津埽塩務、白波務に下卸された解塩を便宜に従い配給されていたと考えてよいのではなからうか。

3 陝西・河東路方面 開封・京東諸州および陝州から東京に至る沿路各州県への解塩の配給が以上の如くであったとして、尚、禁權地分とされた地域の中で陝西路の河中府・解州・虢州・慶成軍および河東路の晋絳慈隰の四州が残る。解州は解塩の生産地であり、河中府等陝西路の州軍は解塩生産者の補給地であり解州とは最も近接した地域である。河東路の四州は汾水西側の地域で、汾水を遡れば、解塩を配給するのに比較的容易なところである。

統資治通鑑長編^{卷一} 天聖四年閏五月己酉条に、姚暹渠が湮浅のため舟が通ぜず、運塩に支障をきたしたことを述べ、州校麻処厚詣闕訴、而右班殿直劉達因請治渠起安邑至白家場、転運使王博文亦言其便、復詔三司度利害、是歲卒成之、公私果利。

と、解州安邑県から白家場に至る姚暹渠の開修が行われたことを記している。宋会要稿食貨^三塩法雜錄同年同月五日条に同記事を載せているが、麻処厚は盤塩帖頭とし、劉達の請文に、「綱塩赴場下卸經久可行」の文言があったことを記している。帖頭は、解塩を官運する責任者であるが、姚暹渠の淤没修理によって、塩を運んで場に赴き積下作業が行へるようになったというわけである。場は白家場のことであろうが、これによって安邑県や解県で生産された解塩は、生産地から、一まず白家場まで運ばれていたことがわかる。また、宋会要稿食貨^四漕運、天聖七年十月条に見える三司の上言に三門白波発運使文洎奏、般塩条件白家場去河中府五七里、三門集津埭塩務去陝府四十五里、乞委兩処同判、依例充季点納下塩貨、云々

とあり、白家場は河中府を去ること五七里のところに在ったことがわかる。恐らく姚暹渠と黄河とが合流する地点近くでなかったか。右文によると、この白家場と三門集津埭塩務兩処の同判は、例に依り季に充って納下の塩貨を点検することになっていたという。白家場は以上によって、生産地から積出された解塩の最初の積下が行われるところであったように、姚暹渠と黄河との合流地点近くにあったことを考えると、河中府以下各州軍・河東路の四州への解塩配給は、生産地自身は運塩以前に配給されたとしても、他は、白家場を起点として配給を受けていたものではないかと思われる。州以下の県鎮などについては、京東の場合と同様であったろう。⁽¹⁸⁾

四 む す び

上に述べてきたところをまとめれば、解塩の行塩地分は、京東西路・京西北路・陝西路・河東路など黄河屈曲点以東の禁權地分と以西および京西南路などの通商地分に分けられており、禁權地分にあつては、生産地付近の陝西、河東方面は、河中府五七里にあつたという白家場を中心に官販が行われ、京西北路など黄河に沿う地帯は、白家場からさらに三

門および河清県に治した白波務を経て開封に至る間に、三門集津鎮・白波務を中心に官販が行われ、開封に搬入された解塩は在京都塩院に收納され、開封城内が糶塩院から売出されるほか、京東の諸州などは、都塩院よりそれぞれ官搬されて各州県城および鎮などで官販されていたと考えられる。配給と運塩とは密接に関連するので、運塩について稿をあらためて詳述したい。

註

(1) 山堂先生群書考索後集^{卷七}再攷本朝塩・品目条に、「塩有四種、一末塩海塩也、其次顆塩、又其次井塩、又其次崖塩」と海塩・顆塩(解塩)・井塩と崖塩の四種を挙げているが、一方において「塩有二類」として顆塩と末塩とを挙げ、粒状の顆塩は解塩とし、末塩には煮海為塩の海塩と、煮井の四川の井塩、煮鹹の河東の土塩を挙げている。

(2) 禁樵地分は三京二八府州軍といわれるが、宋史は三京二七府州軍しか挙げておらず、続資治通鑑長編^{卷九}一天聖八年十月壬辰条に宋史とはほぼ同記事を挙げているが、これには衛州が加えられている。長編によって衛州を加えた。なお長編は孟州を益州と誤って記している。

(3) 解塩の生産については拙稿「宋代解塩の生産と生産形態」(青山博士古稀記念宋代史論叢所収)参照。

(4) 宋史食貨志塩五に「凡通商州軍、在京西者為南塩、在陝西者為西塩、若禁塩地則為東塩、各有経界、以防侵越」とある。

(5) 宋史記事は続資治通鑑長編^{卷九}一天聖八年十月壬辰条にはほぼ同文が見えることは(2)の如くであるが、天聖八年十月壬辰(十二日)は、それまで久しく禁樵地分とされていた三京二八府州軍が、全面的に通商地分に切替えられた丙申(十六日)の四日前である。画期的な変更に関連して、変更直前の制度を定制として総括して壬辰条にかけて記述したものである。定制とする考え方は、清朝雍正年間に編纂された河東塩法志にも右記事が引用されていることによって知られる。

(6) 元和郡県図志^{卷二}河東道に、河中府今為河中節度使理所、管州五、河中府絳州晋州慈州隰州。同書^{卷六}河南道に、陝州今為陝虢觀察使理所、管州三、陝州虢州汝州。

(7) 前掲拙稿参照。

(8) 続資治通鑑長編^{卷二}建隆二年五月丁丑条(宋会要稿食貨三塩法雜錄建隆二年五月条)に、「詔、以安邑解縣兩池塩給徐宿鄆濟之民、先是、数郡皆食海塩、沂而流運、其費倍多、故釐革之。」と建国二年目に徐宿鄆濟四州は淮南塩区に改められているが、徐州は天聖八年の禁樵法廃止前に淮南塩区にもどされていたようで、続資治通鑑長編^{卷三〇}一慶歴元年正月己未条によれば、康

定元年に禁榷法復活後、京師南京及び京東諸州と淮南の宿亳二州に禁榷法が行われていたが、この年南京宛郵曹濟濮單広済八州軍を淮南塩区とすることの利害が論ぜられた結果、宛郵宿亳四州が淮南塩区とされている。その理由として挙げられているのは、「穰地相接」であった。

(9) 拙稿「宋代解塩消費区における諸産塩地」(社会経済史学四〇—一六) 参照。

(10) 青山定雄「唐宋の汴河」(唐宋時代の交通と地誌地図の研究所収二二三頁) 参照。

(11) 宋会要稿職官五都塩院大中祥符六年十二月条。

(12) 都塩院については通商法下に設けられたものがあり、禁榷法下の都塩院とは区別しなければならない。沈括の夢溪筆談^{卷一}「官政

一に、「陝西願塩、旧法官自般運、置務拘壳、兵部員外郎范祥始為鈔法、(中略)、行之既久、塩価時有低昂、又於京師置都塩院、陝西軫運司自遣官主之、京師食塩斤不足三十五錢、則斂而不發、以長塩、価過四十、則大發庫塩、以庄商利、使塩価有常、云々」と見える。右記事は統資治通鑑長編^{卷一}皇祐元年十月壬戌条の本文割注に引用されている。范祥の鈔法が行われ、禁榷法が

廃止されたのは慶歴八年である。その後、塩価の昂低があったので、都塩院を置いて塩価の調節を行ったというのである。この

都塩院は「又」京師に置かれたもので、通商法下に新設されたものであることが明らかである。統資治通鑑長編^{卷一}嘉祐三年七月壬辰条や宋史食貨志塩上大観四年条にも都塩院のことが見える。

(13) 京城の人戸が塩を売出すことについては、宋会要稿都塩院、大中祥符五年四月条に、「詔、京城民買塩糶貨、須依元塩出糶、不得拌和作弊、随处官吏出榜告諭」とあり、政府から買取った塩はそのまま売出すべきで、混物を入れてはいけなさと詔が出ている。不正が行われることが多かったのであろう。

(14) 京東路ではなく、沿辺の辺鄙などところの例であるが、統資治通鑑長編^{卷二}熙寧十年四月乙巳条に、「戎瀘州沿辺地分、蕃漢人戸所居、去州鼎遠、或無可取買食用塩茶農具、人戸願於本地分、興置草市、招集人戸往坐作業者」と、戎瀘州の如き沿辺の地では、塩茶農具の取買にも差支えるので、草市を開いて、商人にこれらの品物を売出させたという。県や鎮等なら塩を出売するのは当然としてよいかも知れない。

(15) 黄河漕運、三門白波発運使については、青山定雄「宋代における漕運の発達」(唐宋時代の交通と地誌地図の研究所収三四九頁) 参照。

(16) 宋会要稿職官^四發運使の項を見ると、「太平興国五年正月命右贊善大夫姚洸為三門發運、十月命太 tử 中允劉順三門發運務」とあり、さらに「景德二年八月以大理寺丞李渭為太 tử 中舍充黄河三門發運使」とある。さらに、大中祥符九年五月十五日には、

宋代禁榷下解塩の配給について(河上)

「三門白波発運使判官、毎歳許二人更番入奏」と、白波の二文字を加えた官名がはじめて見える。一方、張方平の樂全集^{卷三}論京師軍儲事中の黄河関係の記事に、「檢会三門白波発運司偏敕、云々」とあるが、その直前に、「黄河檢会景德二年敕、云々」とあり、偏敕は景德二年前後のものかとも思われ、三門白波発運使と呼ばれるようになったのは真宗時代ころかと考える。これは、本文に述べた如く、至道二年の時点で既に設けられていた白波務が、以後重要性を増してきた結果、白波の二文字が入られるようになったのではないかと考えられる。

(17)

発運司の治所が河清県(白波務)に移置されるまでの治所は何処であつたろうか。新唐書^{卷三}地理志河南道陝州平陸県条に、「三門西有塩倉、東有集津倉」と、三門の西に塩倉があり、東に集津倉があつたことを伝えている。資治通鑑^{卷三}二德宗貞元二年二月甲戌条に陝州水陸運使の李泌の奏によつて、集津より三門に至る車道一八里が開かれて、底柱の險が去けられたことを述べ、割注として「集津倉在三門東、三門倉在三門西」と記している。以上によつて、三門を中にして東に集津倉、西に三門倉があつたことがわかるが、元豊九城志^{卷三}永興軍路陝州平陸県条に、平陸県(山西省平陸県)に張店・三門・集津の三鎮があつたことを伝えているのを見れば、三門倉は三門鎮に集津倉は集津鎮にあつたことと思われる。本文に引用した宋会要稿食貨^四漕運並びに同書食貨^六水運条に見えた三門塋塩務については、同書食貨^四漕運、天聖七年十月条に三門白波発運使文洎の奏言として、「三門集津塋塩務去陝府四十五里」とあり、青山博士は、(15)前掲書で、三門塋塩務は三門集津塋塩務のことであろうとされた。そうとすれば、河清県治の白波に置かれる以前の三門発運務などは、集津鎮に置かれていたと考えるのが至当ではなかろうか。

(18)

前掲拙稿参照。

(19)

宋会要稿食貨^四元祐二年五月十四日条に、絳州垣曲県塩倉の名が見える。県に塩倉があり、塩を売出していたと考えられる。